医癌の話（60・9・21）

鈴江先生を偲ぶ

西岡　諄

京都大学名誉教授鈴江　懐博士は大正九年三高を、大正十三年京都帝国大学医学部を卒業され、熊本医科大学教授を経て京大医学部の病理学教授として京都におもどりになり、感光色素の病理学への導入、また蛍光抗体法の免疫病理学への応用など、斬新且つ実り多い研究成果を挙げられ、昭和三十九年定年を迎えて御退官になりました。

他方、先生は書、絵画、俳句をよくされ、小唄に熟達される等、多趣味で粋な病理学者としても大変有名であられましたのに、去る昭和六十三年十一月四日午後六時二十三分、享年八十八才で急逝なされました。

先生の御同級には青柳安誠先生、山本俊平先生、平澤　興先生の四人の京大名誉教授が居られますが、今頃は四人御揃いで、蓮の台での清談を楽しんで居られること、存じ、心から御冥福を祈り上げます。

（このお話はご本人のお申し出により「神陵文庫」第四巻に収録しなかったのですが、余りにもご生前を彷彿とさせる内容であるため、ご縁の深い西岡先生からご遺族に収録のお許しをおねがいして頂き、幸いお目通しの上、補筆までして下さいました。厚くおん礼申上げ、あらためて本巻に収録いたします。）

鈴江　懐（大9・三部医）

私、ただ今ご紹介をいただきました鈴江でございます。西岡先生から三高の卒業生とご紹介いただきました。なるほど私、大正九年に三高を卒業いたしましたので三高卒業には違いないんですけれども考えてみますと、最も三高の卒業生らしくない三高生だったと自分で思っております。と申しますのは実はこの会館へ参りましたのは今日が初めてでございまして未だかつてここで足踏みしたことはないんでございます。しかも御承知の熊野の近所にありました元の古い三高会館、あそこは頻繁に利用させていただきました。これは実は終戦直後でございましたからどこにもいくとこがなかったんですがな。我々のグループで何か会をするときにはいつもあそこを利用しましてそれが恐らく三高というものを利用しておったことなのでしょう。しかしこれは私が利用したんじゃなくって私の先輩に、皆さんもご存じと思いますが、こないだ亡くなられました細菌学をやっておられた木村廉先生、あの方は三高でございましてちょうど私よりも五年先輩でございます。あの方が医学部長やったりいろいろなことやったりしとりましたから主として斡旋してあそこですき焼パーティとかいろいろなことやった記憶がございます。けれどもそれ以外は三高に係わったんは記憶にほとんどないんです。実は例の吉田山の上に歌碑を建てるときなんかもですね、我々のグループ、殊に京都の人なんか大騒ぎして大いにはしゃいだらしいんですけれども私

は一遍も顔出したことがないんでありまして、別に私が三高を嫌いだからじゃなくって昔からそうなんです。

私、三高に入りましたんが大正六年でございます。六年に入りましてから、その当時から例の一高、三高の試合なんかも大いにやっておりまして、私らもそのカンパだけ、寄付だけやってさっさと国へ帰ってしまって夏休みなんかは皆国で遊んでおりまして、ああいう応援なんかに一遍も出たことがありません。ただ私、三高で記憶がありますのは例の記念祭のときの仮装行列、これはもうクラス全体でやるからおまえも出ろっていうんでひっぱりだされてですね、その後へしょぼしょぼついて歩いたのを覚えています。その時の写真なんか残っておりますけれども、それ以外にあんまり三高ていうのは記憶ないんですね。私、いま司会していただいております西岡先生からお電話いただきまして、六月の中旬ぐらいでございましたか、西岡先生は昔からよく存じあげておりますけれども、三高会館で月例の話をしろという話、しかしそれどういうことなんですかというて、私みたいな現役を退いてもう二十何年も経っているような男にですね、何を話せっていうんですかと先ず伺ったんですが、いや何でもいいんです、先生の人生観でもよろしいしまた特別の研究でおもしろいことがあったらそれをお話しいただいたらよろしいし何でもよろしいからと。人生観といいましても私、医学をやりましたけれども皆様方の中には、殊に文科系統の方には哲学を専攻された方もおりましょうし、そういうふうな方面のことを非常にくわしくや

ってられる方も多いんでありましょうし、私みたいなものが私の人生観をしゃべっても仕方がないと思うのです。

ただ一つ考えられますことは、おそらく私みたいな大正九年三高卒という、ちょうど、今年八十五歳になりますけれども本当は八十六歳なんです。私のクラスは一年ごまかしよるんです。そのごまかして入ったんもおもしろい話がありますが、それも途中でお話し申しあげるかもしれません。なぜ一年ごまかして入れたかというそのテクニックですね、実は先程西岡先生のご紹介に出ました平沢君もですね、平沢総長ご存じでしょう。これは四高でございますけれどもあの君も一年ごまかしてるんです。これが、本当は平沢と私が私のクラスで一番若いんでありまして、本当は、私の次のクラスにいかなくちゃならん年輩なんですね、規則の枠から申しますと。それをいつどこでどう潜りこんできたのか一年先へ出まして、そして平沢も今年八十五歳で私も八十五歳です。恐らく皆様方こう見渡しますとだいぶお年の召した方もおられるようでございますけれども八十五歳以上の方はいられるんでしょうか。だいたい最年長になるんじゃないかと思うんですが年寄りは年寄りなりに、私なりに今までとにかく医学をやった私でございますから長生きの方法などお話しすればよいのでしょうが、しかしこの長生きの方法ほど当てにならないことはないんじゃないかと思うんです。

私もやはりご年輩の方もおいでございますからそういうご経験おありでしょうからですね、

どうすれば実にやすらかな楽しい老後を過ごすことが出来るのかということです。この頃もう老人問題なんか非常にやかましくなってきておりますからそういうことにも関心をもたれましてですね、どうすれば楽しく元気でいけるかということをお考えになっている方もあると思います。そんなことを私の経験からお話ししてもよかったんですけれども、これも少しは話の途中に出て参ります。それ位なら皆さんに聞いていただけるかとも思うんですけれども、先程ご紹介いただいたように私の専門の病理学の立場から何をお話しするか一体見当つきませんでしたが、まあ人生観といっても、実はその時は西岡先生にお話ししなかったんです。お返事すぐしなかったんです。まあちょっと考えさせて下さいと、年も寄っておりますしあんまりお約束しましてもいつひっくり返りましてこの世におらないようになるかもわからないし、六月でございましたから、七、八、九と三か月もあったらその間に何がおこるかもわからないし万一の事があったら。皆さんだいたい西岡先生も御承知と思いますけど非常に多趣味な方でございまして色んなことがおできになりますので私がするのと似ておりますので、もし私が出られなかったら代わりにやっていただけますかというとああそら穴埋め致しますというお約束をいただいていたので何かおしゃべりさせていただこうかと思いまして、それから一週間か十日経ってお電話いただきました時に「それじゃあ何かおしゃべりしましょう」と申し上げ、その時もご相談申しあげたら「何でもよろしい」と言われるんです。

ただ、私いろいろ三高のこと考えると、一つ思い出すことがあるのです。これはこの間、そこの前田さんが私の宅へみえました時にお話ししたことなんですけども、三高の運動場のずっと奥の方に、新徳館という建物がございました。あれができたのがちょうど私の在学時代でした。ですから大正六、七年でしょうか。大正四年に、大正天皇の御即位式典がありました。その時に御所の中へ、特別にいろんな建物をこしらえまして、式の後でその材料をもらってきてあそこへ建てたのが、新徳館と私はうかがっております。私の在学中に、三高在学中にあの新徳館ができましたので、記念講演がありました。これは私、非常にはっきり覚えております。三高に関しての唯一の鮮明な記憶だと思いますが、その時その記念講演をやりました先生が、実は京都大学の医学部の古い初代の先生ですから、御承知の方は少ないと思います。

伊藤隼三という先生がおられました。京都大学の外科は、猪子止才之助先生が府立からうつられて、そして伊藤隼三先生が来たという、二講座です。その伊藤隼三先生が記念講演の演者に招かれまして、講演をお聴きしたことを覚えております。ところが実は、この講演が非常に特有なものだったから私は頭に残ってるのです。どんな題で、どんなお話をせられたか、私全然覚えておりません。しかし、やり方がおもしろいんですね。いきなりこう私らずーっと学生はならんでおりましたけれども、演壇に立ったと思ったらですね、「自分は実は、その皆さんの三高の隣の京都大学の医学部で先生をしておるんだ。何のどういう因縁があったかしらんけれども、自分に

新徳館ができたから記念講演をしろということで、自分はここへ呼ばれてきたんだ。ところが自分は実は入院患者もたくさん扱っておるし、非常に忙しいのでそんな記念講演なんてことをする意志は全然なかった。」というんですね。「それに無理に何回も何回もここの校長(あの時の校長はどなたでしたかね、ちょっと名前忘れましたが)が頼みにくるもんだからやむをえずここへきたんだ」と。「しかし、自分はそういう次第なので、どんなことを諸君にしゃべろうと思うような腹案は全然もってない」と、「何もしゃべるつもりはないんだ」といって、五分ぐらいしゃべって「これでもうしまいや、忙しいから失敬する。」とすぐ帰っちゃうんですね。

あんな講演は、後にも先にも、私初めてでした。これは事実であります。しゃべったのは五分ぐらいだったでしょうね、それで、私らぽかーんとして、何のことかわからんでおりましたけれども、まあ伊藤隼三って、外科の先生ですから、そういうふうなある意味では乱暴な、元気なことができたんでしょうか。もしあの時内科の先生に頼んでおいたら、もっとやさしく何かしゃべってくれたかもしれません。いや、伊藤隼三っていう先生は、非常になんていいますか、わりきるっていいますか。そんなところのある先生でした。私は伊藤先生にちょっとならいました。私のクラスぐらいまでしょうね。大正十三年卒業ぐらいまでが、初代の先生がずーっと残っておられました。京都大学ができましたのは、明治三十二年、三十三年ぐらいでございますから、ちょうど創立后二十年ぐらいたっておった時だったんでしょうね。伊藤隼三先生が来られて、新徳

館で話され、それだけが私非常に鮮烈に頭の中に残っております。五分ぐらいですね、演壇におられましたのは。しょーっと帰っちゃって、私らはぽかんとしておりましたが、後どうなったか覚えておりませんけれども、それだけが記憶に残っております。伊藤先生元気なんですね。「諸君、腹が立ったら、かまわんから撲りたまえ。」と、それもこんな大きな体で、私らいずれもしゅんとしていましたが、帰り途に撲ってもよろしいとか、そんなことも言われたのを覚えております。ああいう講演は後にも先にも、私はじめてですけれども、しかしこの初代の京都大学の先生は、そういうふうな非常に気骨がある人が多かったように思いますね。

しかし、もう一人の猪子止才之助という先生は、これはひじょうに温厚な先生でございまして、外科の先生でございますけれども、非常に診断が的確で、その時はもちろんレントゲンなんかもあるかないかのような時代でございますし、猪子先生のこの手の先には目玉がついておるんだってなことを言われたくらい非常に正確な診断をするような先生でございました。おなかなんか押さえてみますと、「講釈師見てきたような嘘をいい」ということがございますけれども、本当に的確に当てられちゃうんですね。で、今お話しした伊藤先生っていうのは私ら嘘か本当か知りませんけれどもある意味ではずるいんですね。よく言えば豪放な先生でございましたから、その時小児科に、平井毓太郎というこれも初代の先生がおられました。あの鉛中毒を発見されました有名な先生でございますけれども、その平井毓太郎って、これまた非常によく勉強する先生でござ

いまして、例えば極端に言えば医学部の何かの学術集会がありまして、講演でもあれば必ず顔を出されるわけで、どんな会にでも行かれた先生です。

そして定年退官されましても、非常によく熱心に勉強されまして、非常に有名な先生でございます。そういう先生でございますから、それをその伊藤隼三先生は利用してるんです。例えば昼ご飯の時なんかで一緒にご飯食べる時に、平井先生に「平井君、平井君、実はこんなクランケがおるんだけどね。これ君知ってるかい。」と。平井先生は勉強家なもんですから、その言われた病気のこと知らないと、一生懸命自分のとこへ帰って勉強してくるんです。で、あくる日会った時に、「伊藤君、あれはこうこうこういうんだよ。」伊藤先生はそれを知っているんです。あいつに言ったらいろんなものを読んでくるに違いないと、文献を調べてこさせてですね、それを利用しておったのです。これは嘘か本当か知りませんけども。そのようなおもしろい話も残っております。これはむしろ京大医学部の先生のお話ですが三高の先生のお話でもすると、皆さんも興味を持たれる方もおられると思うんですけども、私、三高の先生でよく覚えてるのは、自分の担任だったドイツ語の足立という先生でございます。もう一人ドイツ人の先生でオットー・ヘルフリッチという先生は習いましたからよく知っておりますが、後に京都大学にも移られた成瀬無極先生にもドイツ語を習いました。それから、国語の林森太郎先生、この方は私と同郷でありましたからよく存じておりました。まあそういう方々は覚えておりますけれども、そんな先生のことを、

皆さんにお話ししてもどうかと思います。どうも前置きが長くなりましたが、これから本題に入らせていただきます。

お話は医癌。皆様、雑誌で御覧いただいたと思いますが、「医癌の話」と申しますと、たいていの人は胃の、内臓の胃にできる癌と思われましょうが、私はわざわざ最初に西岡先生におことわりして、「医癌のいはマーゲンの胃じゃございません。医者の医という字を書いて、医癌です。」西岡先生もなんか怪訝なようなお返事でございましたけれども、これどういう意味かと申しますと、皆さん方もよくご存じでしょう、例の七三一部隊というのがあるのは、防疫菌給水部ですね、石井部隊と申しますか。満州で人体実験やったんで非常に有名な部隊です。それからもう一つは九州大学の生体解剖事件というのがございます。あの二つのこと、実は私ちょっと必要がありまして調べておったものですから、それが頭の中にいっぱいあったんです。で、私なぜそういうことをここにもってきたかと申しますと、私、実はあの石井四郎君とは、大学の寄宿舎に一緒におったことあるんです。あの石井四郎君は。私より二クラス上です。で、非常によく知っておるんです。

それから、もう一つのその九大の生体解剖事件の方も、主人公は平光吾一、平(たいら)の光と書き吾(われ)の一と書くんですけど、あの平光先生も、私非常によく知っております。私、大学におる時から、おつきあいしている次第で、このお二人を考えてみますと、石井四郎君も平光先生も、これは実

に人間としては、実に立派な人です。ああいう人が何故ああいう風な事件に巻き込まれたか。あるいは何故ああいう風な事件を起したかということを、非常に考えておったんです。その時、ひょっと「医癌」という言葉が、頭の中にひらめいたんです。どういう意味かと申しますと、医学を専攻するもの、まあお医者さんでもよろしいんですけど、医学を専攻する人には、ああいう風な方へ向かってゆく素質があると申しますか、おそらくこれは私だけではございません。あるいは、西岡先生でも、あの石井中将の地位におり、平光教授の立場におれば、必ず同じことをやったと思います。私でもやったと思います。

と申しますのは、あの事件は、医学の研究の方から申しますと、進むべくして進んだ方向なんです、当時の医学界の状態もああいう風な方へ行く傾向があったわけなんです。それを実は皆様に聞いていただきたいと思ったんです。どういうことかと申しますと、医癌の医という字ですね。医学の医ですね。この医学の医という字。これはもちろん「い」と読みますけれども、これは我々の方で、これはもう西岡先生なんか御承知だと思いますけれども、「医はいなり」ということを申します。「医はい」ですね。これはどういうことかと申しますと、よくこれは、あの落語というとおかしいですけど、いろんな小咄か何かにいいお医者さんがおりまして、患者を診察しまして、そして「医はいなり」ということを考え実行したのです。「医は胃なり」、「医は衣なり」、「医は居なり」であります。これはよく人情話などにでてきますけれども、お医者さんがこの患

者を診察しまして、こいつは貧乏たれで、お金も何もなくて、この三つの「い」が十分でない。つまり「胃」もいっぱいにならない。「着る」ものも十分ない。「居」る所も粗末だと。こういうのがその病気のもとになっておるんだから、「お前さんにはこの薬が一番いい。」って言って、その薬袋の中に、昔ですから、小判でも入れて、これを持って帰れと渡すという話であります。

我々の方では、「医は飯(イイ)なり」、「医は衣なり」、「医は居なり」。食べるもの、着るもの、居るところ、この三つが完全に揃っておれば、病気にはならないんだという話でございますが、その他にまだいろいろございます。これはまあ勝手なことばっかり皆言っとるんですけども、例えば、「医は威なり」。「威」というのは、威厳の威、威光の威でございますけども、お医者さんというものは何と申しますか、権威がなければいかん、という意味なんでしょうね。つまり、患者から信頼されるような人でなければならんと。あるいは意志の意という字を書きまして、「医は意なり」ということもございます。非常に志操堅固な人でなければならんと。ま、とにかく、この「い」という言葉は、よく語呂合せで色々と言われていますけれども、こういうこと私申しますのは、お医者さんの中には何と申しますか、お金ばかり考えて、いるような人もございますので、そんな人を無くすために、昔からお医者さんの心得るべき箴言を、えらい昔のお医者さんが言って居る言葉がございます。

私ここに写してまいりましたが、これは中国の言葉ですけども、「医は仁愛の士にあらざれば

託すべからず。」仁愛の士、にんべんに二かいて、仁愛ですね。「仁愛の士にあらざれば託すべからず。」それから第二条としましてですね、「医は聡明達意の士にあらざれば任すべからず。」それから第三条としまして、「医は廉潔純情の士にあらざれば信ずべからず。」信ずることができないと、これはまあ非常に難しい漢文でございましてあまり難しいものですから、私らなんか若い連中に頼まれまして、よく書くのにこれを砕いて次のように書いております。これを五つに分けまして、仁愛の士、聡明・達意の士、廉潔・純情の士、これを五つにしまして、先ず第一条件として医はすべからく、仁愛の士たるべく、仁愛の士ですね、しからばすなわちもって託すべしと、任すことができると、信頼することができると。次に第二条としまして、「医はすべからく、聡明の士たるべく、しからばすなわちもって任ずべし」と。更に第三条としまして「医はすべからく、達意の士たるべく、しからずばすなわちもって任すべし」と。そのお医者さんには充分学問があって、達意の士であれば、お任せしてもよろしいと。また第四条として「医はすべからく廉潔の士たるべく、しからばすなわちもって託すべし」と、お金もうけばっかり考えてるのがお医者さんじゃないと。最後に第五条としまして、「医はすべからく純情の士たるべくしからばすなわちもって頼るべし」と、頼りにすることができると。私はへたな絵を描いたりしまして、絵の賛としてこの五か条を書きまして、よく若い連中なんかに渡したりします。しかし考えてみますと、本日ここへまいりましたのはですね、もうあんまり廻り道をしていると時間もなくなります

が、さきほど申しましたように、石井部隊のこととか、それから九大の生体解剖事件、そんなことをお話しするつもりなのですが、これはある意味では全くこの医道五訓などとは逆のことと申せましょう。そこで私は本日の標題を「医癌」としたのであります。

ところでこの「医癌」という今日の標題でございますけれども、この「癌」というのは、よくあいつはこの学校の癌だとか、あいつはこの会社の癌だとかいう、その意味の癌なんです。医学界のあれは医者の仲間の「癌」というようなものだと。その「癌」というのを私一つ充分に考えてみたいと思います。それはどういうことかとかと申しますと、このお医者さんというのは、医者というのは非常に何と申しますか、妙な商売なんですね、考え方によりますと。つまり、これは今更私があれこれ申し上げるまでもない自明の事柄ですが、医学の目的は疾病を治療する、或は予防することであります。ところがこの予防治療がうまくいって病気が無くなってしまったならば、医者は失業状態におちいるわけですね。これは一体どういう風に考えたらいいんでしょうか。

この医学が進歩してまいりますと早期発見、早期治療とかで本当に病気も非常に軽くなると申しますか、少なくなると申しますか、いろんな環境もよくなりますし、食べ物とかいろんな物も注意できますから、病気が少なくなる、なくなる。そうしてそれを無くすのが商売なんですから、つまり自分の首をしめるのを一生懸命やっているようなのが、医学なんですね。なんかこう矛盾

しているような。まあしかし、これは他のことでもそうでしょう。例えば皆さん方の中に法律専門の方もおられるでしょうけども、法律でもそうですね。法律がうまく行われて、皆が悪いことをしないようになったら、これはもう法律なんていらない、本当の天国、極楽でありまして、法律家失業になりますね。弁護士さんもいらなくなるという、なんかそんな矛盾したとこもあるんですが、ここんとこもうちょっと突き詰めて考えてみますと、九大の生体解剖事件とか、石井部隊のいろんな事実はみなさんおそらく御存知と思いますが、ああいうふうな事件は、なんかこの医学の矛盾からきてると私には考えられるのです。

私、これは医学界の「癌」、お医者における「癌」と考えたんです。だいたいこの「癌」という言葉がでてきましたから、私「癌」ということをお話ししてみたいと思いますが、この癌という字は、これはもう皆さんも、よく御承知でございますね。この「やまいだれ」に品と山とを書いて「癌」ですけど、これは漢字や国学の専門の方々もおそらくおいでになると思いますけど、これは和製文字であります。これは漢字じゃございません、日本国字であります。これは私なんかが申し上げるより、もう少しその専門の方がおいでになると思いますから、国文学なんかおやりになっていれば、よく御存知と思いますけれども、和製の文字でありまして、やまいだれに「いわ」と書いてある。この「口」が三つ書いてその下に山で品という字でございます。普通には岩と書きますが、この岩と全く同じ意味であります。この「癌」という字を考えてみますと、

例えば今度、お話をするにつきまして、いろんな辞書をくってみました。例えば皆さんも御存知の諸橋徹次博士の大漢和辞典でございますが、あれなんか見ますと、あれは非常に詳しく説明がございますけれども、あの中にこういうこと書いてある、「中華大辞典」というのを引用して臓腑所生毒瘤也凹凸不平且硬固而疼痛云々。と故事来歴が書いてある。その「癌」という字の説明にはわざわざ「中華大辞典」が引用してあるのです。昔の康熙字典なんかには、「癌」という字はないんです。つまりそれ以後に、日本でできた字でありまして、明治以降に日本から逆輸入して、中国で使っている字なんですね。「癌」という字は国字なんであります。この国字についてはおもしろい話があります。これは私よりもちろん専門の方がおいでになると思いますが。

例えば、非常によくできていると思いますのは、「峠」という字です。山へんに上下と書いた。あれなんかも国字なんです。山の頂上へ登って降りるところの峠というんだから、非常によく作ってあるんですけれども、これも中国で逆輸入して、今では中国でも使っておるらしいんですけど。それからもっとおもしろいのは、「榊」という字ですね。木へんに神と書いた。あれなんかも和製の文字らしくいいですね。神様に捧げる木だから「榊」。それから「椿」なんかもそうだそうです。木へんに春と書いて、春で一番目立つ花は椿だから、木へんに春とかいて「椿」。これも中国にはなかったものであります。漢字で「さざんか」と書きますね。日本でいう「山茶花」がつまり中国で「椿」を意味するらしいんですけども、そんな風にいろいろおもしろい話も

ございます。皆さん方も中国へおいでになった方、たくさんおありになると思いますけれども、私、中国へ参って非常におもしろい経験も致しましたが、まずその前に、日本へ中国の人が来ましてびっくりしたお話を致しましょう。実におもしろいことがあるんです。

この頃は、停車場、駅なんかにでですね、そういうところはなくなりましたけど、昔は御婦人室でございました。婦人の部屋、まあそうでなくっても、待合室なんかで、婦人用の特別の御婦人室です、あれを中国の人見たらびっくりするそうですね。婦人を御する部屋とは、日本人は実に風流な部屋を作ったもんだというんで、婦人を御する部屋まで作ってあるっていうようなことを、私聞いたことございます。それからもう一つ、私がいつも思いおこしますのは、日本の有名な画家の徳川時代の狩野探幽です。あれも中国の人が見ると不思議がるそうですね。日本人は、実に風流な雅号をつけるものだと、婦人の最も幽厳なるところを探るっていうのは、これは実に風流な名前だっていうんで、探幽というのは、そういう意味だそうでございます。中国では。そのかわり、また我々が中国に参りまして、この私が、私の専門の方で非常におもしろい経験をしたことがございます。上海でしたか香港でしたか、大学の病院に参りましたところが、「幼児料理所」、日本の料理ですね、クッキング。「幼児料理所」という部屋があるんですね、子供を料理するところというのはどういう意味かといいますと、これは治療室なんですね。「幼児料理所」とあるんです。えらいことを書いてあると思って、子供を料理して食べるような錯覚をおこしま

すが、中国と日本と共通の漢字を使っております関係上、そんなおもしろい話もございます。

この漢字を作ることにつきましては、専門の方がおいでになると思いますので、申し上げませんけれど、今度勉強して参りましたところが、四つの法則があるとか、いろんな難しいこと書いてございまして、象形文字なんて御存知ですね。指事文字とか、いろんなこと書いてございますけれども、そのうちの合意文字というのに「癌」という字は、はいるそうなんです。やまいだれに品そして山と、この漢字がございますけれども、これは実は、文献調べて参りますと、江戸時代に「病名彙解」、「病名いかい」という書物があります。「語彙」の「彙」ですね。今はこんな字使わないんですけど、こういう書物がございまして、これは芦川桂洲という人が書いた書物であります。貞享三年、一六八六年発行とございます。この中に乳岩と出てくるのです。そのガンという字は、この岩の字が書いてあります。見出しにも、中の説明にも、時々乳岩とこの字が出てくるんですね。今我々が使っている、皆さんもよく御承知の、胃癌と肺癌とかいうものは絶対でてこないんですね。つまりお乳の癌というのは外に出てるもんですから、外からよくわかりますから、それでまあこういうものがでてきたんだと思いますけど、それが目についたので、その説明をみますと、非常に簡単に書いてございます。

「堅く悪性なる腫瘤、乳房のはれものにして、かく結び、漸次、拡大して、ざくろ状になり、非常に治癒しにくい。」という説明がございます。治癒しにくいということが大事なんです。ま

だ死に至る病気なんてことは、全然書いてございません。だから、まだ江戸時代ではなくて、明治の、おそらくは大正時代に入ってからではないでしょうか、癌というものが非常に恐しい病気で死につながる病気であるという概念が、普通の一般の人にも普及しました。さて、その乳癌とは何かといいますと、お乳に癌ができまして、だんだんと膨れあがってきて、大きくなって、岩がごつごつしたようなものになって、塊ができ。でこぼこができ、それで岩のようなものが、ぱっとくっついたような、そんなようなことで、乳岩としたのでしょうが、それから私、他の書物も調べてみましたが、大槻文彦という人の、これは皆さん御承知の「大言海」という辞書がございます。この「大言海」というのは、第一巻が出ましたのは、昭和七年でございますが、その中に、「癌腫」という項目がございますので、引いてみますと、こういう説明がございます。「腫物(はれもの)の一種。略して癌とのみもいう。体中ところどころに発して、極めて治しかたし。」治りにくいと。その次にですね、「多くは上流の人に多し」なんて書いてあるんです。上流の人に多い、というのは、ちょっと不思議なんですけど、これはおそらく大槻さんが、これを書いたのは昭和七年ですから、明治の末期から昭和の初めですね。その時には病気でお医者さんにかかって、癌と診断されるような人は、普通の一般の民衆じゃなくて、おそらく上流の、お医者さんにしじゅうかかっている上流階級の人が多かったという意味なんでございましょうね。それから、「ただ極めて治しかたしとす。」と書いてございまして、死ぬということは、一語も書いてない

のです。

ところがこれに反しまして、結核は説明しなくても皆さんよく御存知でしょうけど、結核は大槻文彦さんの「大言海」にはこういう説明がしてあるんです。結核「核(さね)を結ぶは、患部の凝りて、結ばるることなり。」これは、大槻先生も国文学者ですが、さすがに医学のことは全然おわかりにならなかったと思うんです。おそらく、熱心な先生ですから、大槻先生は「大言海」を仕上げる時には、足が細くなって、立てなかったそうでございます。座りこんで朝から晩までやっておったものですから、足が萎えてしまって、立てなかったというような話を聞いておりますけど、そういう熱心にやっておった先生ですが、医学書をひもといてみても、あんまり意味が通らず、実に文章がおかしいんです。結核と書きまして、「核を結び、患部のこり、結ばるること。一種のばい菌の名。」とか書いてあるんです。「結核菌という。人体中に寄生するところにより、肺結核、腸結核などの病となる。」と。又「肺結核菌の空気、あるいは食物とともに、肺の組織中に次第に繁殖して、肺を損なうもの。」と、こう説明してあります。「発熱し、喀痰、喀血して、ついに倒るに至る。肺病、肺癆、癆症、癆病、癆咳。」と、こういう風な説明があるんですね。これ読んでますと、文句がとぎれとぎれになったり、おそらくこれは苦心して、大きな書物でも読まれて、それらを要領よく綴り合せて書かれたんだと思うんですが、この結核の説明の中には、「ついに倒るに至る」と書いてあります。

ところが、癌の方の説明には一切それはございません。だから大槻先生の時代、つまり明治の末ぐらいまでは、癌は死ぬ病気ではない、少くとも死病と考えていなかった。結核の方がむしろ死病といわれていたんですね。実際そうなんです。我々医者仲間でも、おそらくそうだったと思います。明治の末ごろまでは、おそらく結核の方が、非常に恐い病気でありまして、癌というものは、あまりそう多くなかったのかはともかく、あんまり気にしなくって、結核というものを非常に恐がっておりました。実際、結核というものは、小さな子供なんかでは、小児結核なんかになりまして、一家全部が倒れてしまう場合が非常によくあったわけです。それで、その結核という病気に就いてお話してみますと、例の樋口一葉なんかそうでございますね。樋口一葉の家系は、結核にかかる人が非常に多くて、樋口一葉自身も結核になって何時死んでしまうかわからんので、非常に恐怖心を持っておりまして、「にごりえ」とか「たけくらべ」とかいう名作もふくめ、本当に一年ちょっとの間に全部の名作を仕上げて書いてしまった。まあ多くはございませんね、樋口一葉全集なんかは。しかしああいう風な、永久に残るような名作を、一年ぐらいの間で仕上げた。それは樋口一葉が、自分の周囲の自分の親族・血族に、結核があまりに多くて死んでしまうもんですから、自分も死ぬんじゃないかと、早く仕事を仕上げよう、仕事を仕上げようと、非常に熱をこめてやったらしいのですね。

それでああいう風な立派な仕事ができたと思います。それから、明治生れの、お年めした方も

いられますからよく御承知と思いますけれども、徳富蘆花の「不如帰」も、有名な川島武夫のロマンスの問題ですね、あれなんかも結核で死ぬというところの非常に有名な場面がございますね。台詞を実は写してきたんですけども、私なんかが読んでも、あまりどうもロマンチックじゃないかもしれませんけど「治りますわ。きっと治りますわ。ああ人間は何故死ぬのでしょうか。生きたいわ。千年も万年も生きたいわ。死ぬなら二人で、ねえ二人で。」てなもんで、これは名台詞ですね。私もある時見たことございますけども、ここのとこでございますけども、「生きたいわ。人間は何故死ぬのでしょう。千年も万年も生きたい。」という非常にロマンティックでありまして、しかしこの結核という病気は恐れられておりましたけれども、一方ロマンティックな点もありました。若い女の人なんかは赤い眼帯でもして、首にハンカチでも巻いて、「死ぬんなら結核で死にたい。」というようなことも、言ってる人もあるくらいで、いや、どうもこんなことしゃべってますと、あ、もう四時過ぎましたな。石井部隊のことに入らない前に時間が無くなるかも知れません。しかしまあ折角のことですから、このまま続けさせて頂きましょう。

徳富蘆花の「不如帰」のことをお話ししましたが、これと並んで当時の傑作小説とせられた尾崎紅葉の「金色夜叉」の事を思い出しました。これに就いて実におもしろい話があるんです。初代の京大医学部の先生で、岡本梁松という法医学の先生がおられましたが、私が教室で実際にきかされた話ですが、「この頃その〝きんいろやまた〟という小説がやかましくなってるが、あれ

何かね。」と。「きんいろやまた」というんです「金色夜叉」のことを。実際これは岡本先生が言われたんですが、実際に。これはわざと我々を笑わすために言われたのかもしれませんけども。結核の話はそれくらいにいたしまして、癌に話を戻すことと致します。だいたい日本の状態に比べますと、外国では、癌というものは、非常に詳しく昔から知られておりました。死につながる病気だと非常にはっきり書いてあります。これは皆さんも、よく御承知だと思いますけど、ギリシャ時代のヒポクラテス、このヒポクラテスの書きましたものの中に、非常に詳しく書いてございまして、あまり読んでおりますと時間がなくなりますけど、「腫瘤はどんどん大きくなり、時には他の部位にも飛び火して」なんて書いてあるんです。「ぐりぐりを作って、その人を殺す。」とはっきり書いてあります。これは今からだいたい二千三百年ぐらい前の話です。またこの癌で倒れた有名な人といたしましては、尾崎紅葉なんかが亡くなったのは、癌でございますね。例の有名な東大の入沢先生とか、初代の衛生局長の長与専斎とか、そんな人にも診察を受けておりますが、明治三十六年十月三十日、三十七歳で胃癌で亡くなっております。「モルヒネの量増やせ月の今宵なり」というのが、辞世の句になっておりますが、田山花袋なんかも癌で亡くなっております。徳田秋声　阿部知二、竹田泰淳、中野重治、正宗白鳥とか、大仏次郎、今東光なんかもそうですね。こんな人が癌で亡くなって、それから例の有名な中城ふみ子の「乳房喪失」なんてのもございますね。

どうも枝葉の事ばかり申し上げておりまして時間が過ぎてしまいましたので、ずっとはしょりまして話していきますが、初めに申し上げました満州の石井部隊のこと、それから九大の生体解剖事件のことに話を進めることと致します。まず満州の石井部隊の事に就きましては人体実験をしたということを中心として森村誠一というルポライターが共産党の新聞に連載し、それが、「悪魔の飽食」、という単行本となって上梓されています。それから上阪冬彦という人が、九大生体解剖事件のことを書いておりますが、この人は九大出身の婦人科医で福岡で開業しております。最初に石井部隊の事からお話し申しあげたいと思いますがこの隊長の石井四郎軍医はですね、一番はじめに申し上げましたように、私一緒に京大の寄宿舎におりました。非常によく勉強する男でした。しかしずるい所があるんです、ある意味では。森村誠一の「悪魔の飽食」を、読んでみますと、石井部隊長は満州でも夜中に突然起き上がって、「おいこれから全部幹部集めろ。」というような事を、十二時か一時頃起きてやったそうですが、石井君は昔から夜起きて仕事をする癖があったんです。面白い挿話があります。ちょうど私が研究生時代で昭和二年頃でございました。石井君がやはり深草の軍隊の所属になっておりまして、そこからどういう関係ですか細菌学教室へ研究に来ておりました。研究に来るのはいいですけど、昼やって来ないんです。晩の皆が帰った十一時か十二時になってやって来るんです。門が閉まっておりますので、門を乗り越えて入ってきまして、そして細菌学教室は自分がよく知ってますから、細菌学教室に入りまして仕事

を始めるんです。それから朝の三時か四時頃にそーっと家へ帰っちゃうんですね。昼寝してまたあくる日の晩出て来る。それはいいんですが、せっかく皆があくる日の準備のために、細菌の研究はあまり皆さん御存知ないかもしれませんが、試験管とかシャーレとかいろんな物がいるんです。それを皆きれいに洗いまして、あくる日の実験の準備をして皆帰っちゃう。それを皆使っちゃうんですね。石井君は自分で準備しないで、皆、人の準備したものをぱーっと夜中にかっさらっていって、やっとりました。おもしろいんです、石井君というのは。一種の豪傑なんでしょうね。まだ面白い挿話があります。私も直接聞いたんですが、あの頃発熱療法というのがありまして、お医者さんの方なんか御承知でしょうけど、一定の温度以上になりますと人間の体の中にある細菌は死にますから、人間が耐える程度の熱を出して、それで細菌を殺してしまう。例えば淋病ですね、淋病菌なんか殺せるわけで。それで石井君も当時そんな実験やっとりました。おもしろいんですね。

軍隊におりますから、新兵を並べまして、「おい前を開け。」とズボン開かすんですね。「おいチンポを出せ。」という。女の人もおられますな。どうも妙なこと言ってすみません。その一物の先に検温器を持っていって、「おいその穴から入れ。」とか言って、尿道に検温器をつっ込みまして発熱療法の実験なんかやって、データ作って、論文書いております。こんなことをやる男でしてね。普通の男やったら、そんなことできませんけど、軍隊ですから、命令でやったんでしょ

うね。そういう風なことやる男でした。そういう石井君だけど、寄宿舎におりましても非常によく勉強しまして、まったく勉強するといっても、夜やる癖があったものですから、いつみても夜中にやってるもんだから、よく勉強してるように考えたのかもしれませんが。しかし成績は非常によかったです。

皆様も御承知だと思いますけど、当時京大の総長は荒木寅三郎先生でしたが、自分のお嬢さんと石井君と結婚させて、だから石井君の奥さんは、荒木寅三郎先生のお嬢さんなんですね。そんな風な石井君で、非常に嘱望されていた訳であります。

それから次に九大事件の中心人物だったもう一人の九大医の平光という人も、どういう人かと申しますと、非常に趣味の豊富な人でした。私なんか時に学会で一緒に同行したことがあるんですが、行く先々でスケッチなんかやりまして、油絵具なんか持って行きまして、そこでよく写生なんかしまして、私もそんな絵もらったこともありますし、この二人がああいう風なことになったというのは、あまりいらんことをしゃべり過ぎまして、時間なくなってしまいましたけど、当時の医学界の状態というものがそういう風な事態を醸す引き金になっていたかと申す事が出来ると思います。例えば我々の病理の方から申しますと、病理解剖が専門でございますから、死体解剖も非常にさかんにやったわけでございますけども、その死体解剖というのをやるのは、何と申しますか、病気の焼け跡を見るようなものであって、本当の観察は火事になっておる最中に、焼

けてる現場を見なければ、本当の理解はできないんだという考え方が、だんだんと浸透してきたんです。もし余裕があったら申し上げようと思いましたけども、昔のヒポクラテスの時代から我々の時代に至るまでの経過を追ってみますと、そういう風な死んだもの、動いていないものを観察するのはだめなんだということが非常に昂まってきていたんです。

それで私の先生格にあたる、清野謙次という先生がおられましたけども、あの清野先生なんかも生体染色ということを始められまして、非常に大きく病理学が進歩をしております。生体を染色、生きておる体に色素を入れて、そしていろんな細胞のそれをどうなるか、ああなるかと、細胞の働きとかいうのを皆詳しく見たわけで、生体染色と申しますけども、そういうことが医学研究の主流になっとりまして、そういう風な生きた状態で物を見なければ駄目だということになっておりました。ところが、九大事件の平光先生はどういうことやられたかと申しますと、平光先生も本当に立派な仕事残されておりますが、主なテーマは、「脳の循環の解剖学的研究」なんです。平光先生は脳の循環のことを、「ただ死んだ脳を切っておって、いろんな血管の走行なんか調べてもつまらない。本当に生きた動物の(人間ではありません)血液が巡っておるところを見て、そうして本当にわかってくるんだ。生体観察が非常に必要なんだ。」ということを非常に強調しております。

これは実は私、どうしてこういうことを特に申し上げたかと申しますと、これは本当は私だけ

が知ってる事実なんです。平光先生が私らと一緒に旅行して、そういう事を始終語っておられたんですね。死体だけをなぶって、ああいう風な解剖をしておっても本当のことがわからんと。生きた人間の体で血液の流れている状態を直接観察して、本当の知見ができるんだということを非常に強調しておられました。しかも実際此の事を書いた文献があるんです。これは終戦一年ぐらい前の、たぶん「日本医事新報」だったと思いますが、非常に小さな論文でありますけども、平光吾一と署名があって、そのことを書いてあります。ところがこれはさすがの、何といいますか探偵みたいな上阪冬彦さんでも、森村誠一でも見つけておりません。非常に小さな論文ですから。観察は生体でしなきゃならん。これは平光さんの口から直接聞いた話なんですがそれが現実の論文として書かれていたのです。それは上阪冬彦の九大生体解剖事件の書物でも、それから森村誠一の「悪魔の飽食」の中にも、ちょっと平光氏の話が出てまいりますけども、全然書いてございません。そういうこと考え、ああいう風なことといったのですが、あまり時間がないのでよく説明は申し上げられませんけども、一番初めに申しましたように、私がもし石井四郎の立場におり、また平光教授の立場におりましたら、同じことをやったと私思うんです。医学界の趨勢がそうなっておったんです。生きた体で生きた観察しなくてはいけないと。本当に医学の落とし穴と申しますか、そういうところからおこった事件と私は解釈しております。まだこの他にもいろいろ申し上げたいことがたくさんあるんでございますけど省略させていただきます。

最後に私一言申し上げたいことがあるんです。これは西岡先生から御連絡いただきまして、ここでお話しろということで、非常に勉強になりました。あれ以来私毎日、実は今日もお話する暇がなかったから申しませんでしたけど、非常に新聞を詳しく読みましたが驚きますことに毎日我々医学の方に関係してる事がたくさん出ておりますね、私、これほどたくさん医学関係のことが新聞に出されると思っていなかったんです。御承知のように、医学の方ではいわゆる「生老病死」というのが非常に医学に関係あって、「生老病死」ということだけでも、毎日の新聞に非常にたくさんのっておる。こういうことを読みまして、非常におもしろいことがたくさんあるんですけども、ここで提言したいのは、私この三高会の役員の皆様方に申し上げたいのは、私みたいな年寄り、年寄りと申すと他の方に失礼かもしれませんけど、そういうお年をめして、すこし暇になってる方に、一つテーマを出して注文していただきたいと思うんですよ。こういうことを調べてみないかと。例へば「生病老死」など如何なものでせうか。

大変どうもつまらんことをおしゃべりいたしまして、どうもありがとうございました。